

巻頭言「新大学の紀要第2号発刊にあたって」

著者	鈴木 滋彦
雑誌名	アグリフォーレ・レポート：静岡県立農林環境専門職大学静岡県立農林環境専門職大学短期大学部紀要・年報
号	2
ページ	1-1
発行年	2022-06-30
URL	http://id.nii.ac.jp/1775/00000024/



巻頭言「新大学の紀要第2号発刊にあたって」

鈴木 滋彦（静岡県立農林環境専門職大学学長）

新大学が開学して2年が経ちました。将来の農林業を支える人材育成を目指して、2020年4月、Shizuoka Professional University of Agriculture（静岡県立農林環境専門職大学）とShizuoka Professional University Junior College of Agriculture（静岡県立農林環境専門職大学短期大学部）が開学しました。専門職大学は「高度な実践力」と「豊かな創造力」を養うことを目的として制度化された新しいタイプの大学で、2021年度末の時点で17大学が設立されています。その中において、本学は全国初の農林業系の公立大学であることが特徴の一つです。栽培技術、生産技術に加えて加工・流通・販売と経営の分かる人材の育成が使命であり、あわせて、農山村地域の環境や文化伝統を守り、地域を支えるリーダーを育てることを目標としています。

コロナ禍のもとで2020年4月に開学し、本年（2022年）3月には短期大学部の第一期生の学位記授与式（卒業式）を行うことができました。新型コロナウイルス感染症は、WHO世界保健機関が「パンデミック相当である」との見解を示すに至り、現在もその余波に苦しみつつ収斂が望まれています。思えば、第一期生の入学式はホールで行うことができず、教室に分散して放送で行うなどの対応を取らざるを得ませんでした。開学直後の4月は休講措置とし、5月にはオンライン授業を模索、日本中の大学が授業の進め方に苦しむなか、本学は幸いにも6月から対面授業を行うことができました。

開学して2年が経ち、機械用語でいう「初期故障」の時期を乗り越えることができたと考えています。フライトにたとえるなら、離陸に成功して一安心といったところです。ここから先は、安定飛行に向けてさらに上昇していく必要があります。大学らしく、飛行高度を高めることが求められています。今後考えるべきは「大学らしく」であり、そのことは次の3点に集約されると考えています。「教育と研究」、「自主性・自律性」、「学位授与」です。

紀要は、大学にあっては「教育と研究」の両方を結びつける必須のアイテムである、との思いを強く持っています。実践教育の実績を記録として残すことは専門職大学の責務であること、農林業分野における教育手法の開発は学術的な価値が評価されるべきであること、新たに始まった臨地実務実習は未知の分野であり、職業教育の課題として貴重な経験となることなどがその理由です。

新規性の高い原著論文の投稿の場となることは当然のこととして、専門職大学固有の教育活動を学術的な著作として記録する場となることを期待しています。大学らしさの必要要件のひとつが「教育と研究」であり、この紀要は大学らしく飛ぶための第一エンジンに当たるものかもしれません。